

SATO YAMA UMI プロジェクト
-2019年度ユース海外インターンシッププログラム活動報告書-
清水春佳



派遣国：ベトナム

受け入れ先団体：Viet Nature (Bird Life International Tokyo)

滞在期間：2019年9月16日～2019年10月18日

インターン活動について

1. 目的

私は将来、国内のみにとどまらず、国際的に環境保全に携わっていきたいと考えていた。そのため、日本から離れて他国で働く際に自分はどこで強みを発揮できるのか、また他国で現地の人と共に働くということを通して、自分自身がどのような感じかを知りたいと考えた。文化も言葉も異なる環境で一緒に仕事を進めるといふことに難しさを感じるのか、楽しいと感じるのか、今回のインターンではこれらのことを自分の中で感覚として知ることの一つの目的とした。また、過去の環境保護ボランティア活動での経験を通して、環境保全の基礎となる環境教育の重要性を認識していたが、今まで環境教育はおろか、教育の分野にすら携わったことがなかった。そのため、環境教育を行う上で何が重要なのか、環境教育の分野で自分自身に何かできることがあるのかを活動を通して知ること、今後環境保全の分野にどのような形で自分自身が携わっていきたいかを見つめ直すことを第二の目的とした。

また、本インターンでは裏テーマとして、現地コミュニティに溶け込むことを設定した。一緒に現地の人と活動することで今回初めて訪れることになったベトナムについて知り、自分自身がどこまでベトナムのコミュニティに入り込むことができるのか、どこまで柔軟に対応できるのかについて知りたいと考えた。

2. 活動先について



ベトナム、クアンビン省（Quảng Bình）の Le Thuy 県にある、Viet Nature のオフィスで働いていた。私自身はクアンビン省の省都であるドンホイ（Dong Hoi）市内でホームステイをさせてもらっていたため、オフィスにはバスとバイクで片道1時間ほどかけて通った。

Viet Nature はバードライフ・インターナショナルと協働している独立した現地 NGO であり、現在はベトナムの環境保全に関するいくつかのプロジェクトを複数同時進行している。今回私が参加させてもらったプロジェクトは、ベトナム中央北部にあるクアンビン省とクアンチ省（Quảng Trị）にまたがって位置するアンナン山脈・生物多様性重要地域（KBA）で実施されている。この地域では低地性湿潤常緑樹林が発達し、40 種以上の世界的な絶滅危惧種や固有種が生息している。しかし、この豊かな森林生態系はベトナム戦争により大きなダメージを受け、回復が進んでいない地域も多く残されている。また、地域住民の多くはベトナムでは最も貧困層となる少数民族のヴァンキェウ族で、現在も森林資源に依存した生活を送っており、近年の経済発展に伴い、生計手段のための森林伐採や資源の過剰採集、違法狩猟などが増加し、残された貴重な生態系も危機にさらされている。

3. プロジェクトについて

本プロジェクトでは、地域住民による自然資源の持続可能な利用を促進し、生物多様性を保全するために、環境教育、普及発活動と若手人材育成を通し、地域住民の行動や認識の転換を目指している。本プロジェクトの対象地域には環境教育の対象校として5つの小中学校があり、私は本インターンを通して対象校の生徒たちへの環境教育および対象校とは別に都市部に住む生徒および親子向けの環境教育に携わった。具体的には下記の活動内容に記した。

4. 活動内容

I. 対象校へ向けた活動

- 1 “清掃キャンペーン*1”と“コンペティション*2”の活動内容の考案
- 2 対象校訪問時の生徒および先生向けのアンケート、インタビューを作成
- 3 対象校訪問、“清掃キャンペーン”と“コンペティション”の実施
- 4 “清掃キャンペーン”および“コンペティション”後の活動内容をまとめた文章作成
- 5 生徒向け環境教育用の“Vietnam Pheasant”のビデオを短くするための案を作成

*1：清掃キャンペーンと称して対象校で生徒と共に清掃活動を行った

*2：コンペティションは環境保全、野生動物保全の重要性の気づきを得ることを目的に、クイズ、ゲームそしてディスカッションを行った

II. 都市部の生徒へ向けた活動

- 1 市内の生徒およびその保護者に向けたアカアシドゥ克蘭グール*3 観察会で行うアクティビティの考案
- 2 アカアシドゥ克蘭グール観察会について紹介する文章の作成
- 3 ドンホイ市内の高校で行われたエキシビションへの参加
- 4 エキシビションの報告書を作成

*3：アカアシドゥ克蘭グールはベトナムなどに生息する絶滅危惧種のサルの名称。

III. その他の活動

- 1 国際シンポジウムへの参加
- 2 アカアシドゥ克蘭グール観察会への参加
- 3 プロジェクト内容をまとめた短いビデオ用の内容を考案

5. 活動の結果

I. 対象校へ向けた活動

今回対象校で実施するためのアクティビティ（清掃キャンペーンおよびコンペティション）の内容をどのようなものにしたいか、どのようなものにするか、一から考えてほしいとの要望で、初めてアクティビティをゼロから作るということを経験した。とはいっても私には環境教育の知識がほとんどなかったため、インターネットから情報を得るところから始まった。やはり現地の環境や生徒たちの状況は日本のものとはかなり異なるようだったのでアクティビティのレベルや全ての生徒（最終的には50人規模に落ち着いたが、初めは100人を対象にするといわれていた）が参加できるようにと考えると、初めは難題のように感じたが、何とか形にするところまでに至った。実際は清掃キャンペーンについては過去行ったことがあったためほとんどやることはなく、コンペティションのアクティビティ作りに大半の時間を費やした。原案を私が作り、それをもとにViet Natureのスタッフと話し合いつつアクティビティを形にしていった。アクティビティ作成時の私はまだ対象校に訪問したことが無く、様子もわからなかったため、この時現地スタッフのアドバイスはなくてはならないものであった。

対象校で今回のように大規模で新しいアクティビティを行うのは初めてとのことだったので、子供たちがどのような反応をするのか、本当にこれでいいのか、と内心不安であった。しかし、実際に学校を訪れてコンペティションを実施すると、多少の混乱はあったものの、生徒たちは皆楽しんでくれているようだった。コンペティションの後に行ったアンケートでも、全ての生徒が楽しかったと答えてくれていた。インターン開始前に、まずは生徒に楽しんでもらうことが大切だ、といわれていたが、まずそのハードルをクリアできたのではないかと思い、良かったと安心した。しかし、楽しかったという感情のその先に、生徒たちが学んだことを日常生活で実践してくれることが、次のステップとして非常に重要であるとも感じた。こちらに関しては現地の環境からも未だ難しい点が多く、私の滞在中にここへの突破口を見つけることはできなかった。



対象校でアクティビティを行った際の写真。
楽しんでくれていたようだ

II. 都市部の生徒へ向けた活動

インターン最後の週末にドンホイ市内の高校でエキシビションが行われることが急遽決定し、私も5分ほどと短い時間ではあるがスピーチを行う機会をもらい、インターン中に体験させてもらったアカアシドゥクラングル観察会の経験について1000人ほどの生徒の前でスピーチを行った。スピーチは事前に考えて添削してもらっていたが、本番までに覚える時間があまりなく、紙を見ながらのスピーチとなってしまった。1000人もの人を前に英語で話したのは初めてだったので緊張したが、何かしらの印象を生徒に残すことが出来たらと願っている。ただ、その後生徒から直接話を聞くことはできなかったのも、少しでも時間をとってインタビューするべきだった。

アカアシドゥクラングル観察会のアクティビティについては、私の滞在中に観察会の日程を調整することが出来なかったため、実践するまでには至らなかった。また、提案したものの半分ほどはすでにベトナムでも例がたくさんあるとのことで新鮮味のないものになってしまった。しかし、インターネット上のサイトからヒントを得た環境教育用ビンゴゲームについては、この観察会だけでなく、他のアクティビティでも使えそうだと意見を現地スタッフからもらうことが出来た。日本では当たり前のようにして行われているゲームも、ベトナムでは時として新しいゲームになりえるのだと感じた。初めはインターンに来たからには、全く新しい自分オリジナルの何かをつくらなくては、と考えていた。ビンゴゲームは私の新しいアイデアではないが、こういった日本にある既存のアイデアを伝えることも日本から来たインターン生の役割のひとつかもしれないと感じた。



エキシビションの様子：現地スタッフが英語からベトナム語に私のスピーチを翻訳してくれた

III. その他の活動

インターン開始第二週目の初日から二日間、ドンホイ市内でキジ目に関する第7回目の国際シンポジウムが開催された。Viet Nature のプロジェクトのひとつにベトナムの固有種であり絶滅危惧種でもあるコサンケイ (Vietnam pheasant) を野生復帰させるプロジェクト

があり、Viet Nature も参加および開催団体のひとつであったため、私も参加させてもらうことになった。会場はドンホイ市内のホテルで、私は主に T シャツおよびピンバッジをシンポジウムの参加者に販売することで、Viet Nature の活動資金となる寄付金を集めた。いつもより多くの T シャツを売ることが出来たようだった。会場には 100 人ほどの参加者が集まり、キジ目の保全や将来について真剣に考え、取り組んでいるようだった。今まで自身の大学での研究内容（動物園動物の繁殖について）の意義を感じられなかったが、シンポジウムでこれだけの人が真剣にキジ目の保全に取り組んでいる姿勢を見て、自分のやっている研究内容もまったく無駄なものではなく、将来どこかにつながるものなのかもしれないと感じた。

シンポジウムが終了した後、Viet Nature が参加者のために開催したアカアシドゥクラングール観察会にも参加させてもらった。これを最後にアカアシドゥクラングール観察会に参加する機会はインターン中になかったため、ここで観察会に参加し、アカアシドゥクラングールを直接見ることが出来たのは本当にラッキーであった。本観察会では KBA の森の中にある一軒家で Viet Nature のスタッフおよび参加者と共に一泊し、森の中での非日常的な生活を体験することが出来た。ここでの体験を機に現地スタッフとの距離が近くなり、仲良くなるきっかけとなったため、良い機会であった。現地の文化をより深く知るにはオフィスで机に向き合っているだけではわからない。そう考えると、このタイミングでベトナムの文化についてより多くのことを知る機会が持てたのはよかった。

ビデオ作製のためのアイデア考案では、ベトナムの生徒のみでなく、世界中の人々に Viet Nature の環境教育のプロジェクトについて紹介したいという要望をもとに行った。ビデオ作製について私にまったく知識がなく、初めの方はどのように進めるかについて何度も現地スタッフと確認する必要があった。最終的には英語の字幕となる部分を私が作り、字幕の内容に合った映像を動画編集の知識のある現地スタッフが当てはめてビデオを作成するという事になった。どのようなものが求められているのか探りながらだったが、最終的には形にすることはできた。しかし、ビデオを実際に作るころまでは時間がなくてできなかった。



国際シンポジウムでの様子: T シャツを買うときは陽気な人も、会場では皆真剣な様子だった



アカアシドゥクラングール観察会での森の様子と、アカアシドゥクラングール

6. 感想・気づき

このインターンを振り返ってみて、私に日本から来たインターン生として自分の役割が果たせたかどうか、と考えた時に、素直に出てくる言葉は「正直、わからない」である。しかし、私は

このインターンを通して、いかに自分が周りの人に支えられ、助けられてきたのかを実感することが出来た。今まで自分から積極的に行動に移してきたと考えていたが、決してそんなことはなかった。周りの人がいつも気にかけて、声をかけてくれていたからこそ充実した日々を送っていたのだ。これは自身の反省点ともなっており、今後は自分からもより積極的に関わっていきたいと感じた。

一つ目の目的に対して、結論から言うと、ベトナムでベトナム人スタッフに囲まれ、ベトナム語が飛び交う中、日本人一人でインターンの活動を進めていくのは難しくもあり、楽しく、面白くもあった。具体的には、英語で物事を上手く伝えられないとき、たびたび変わるスケジュールと要望に直面した時、異なる文化、そして言語の中で仕事を進めることの難しさを感じた。プロジェクトや対象校の状況などの様子がわからない等の情報不足もあり、本当にこれでいいのかと思うときもあった。時間をかけて作ったものが役に立たないとわかった時にはがっかりし、ここに費やした時間は何だったのだろうかと思い、自分の役割に疑問を感じることもあった。今回のインターンでは、異文化の中で仕事を一緒に進めると、日常生活と一緒に過ごすのでは全く異なるということを実感することが出来た。異文化の中で仕事を進めるのは、異文化の中で生活するのは別の難しさがあり、ここで楽しいと思えるようになるためにはもっと長期間腰を据えて、自身が完全にプロジェクトを担う存在となる必要があると感じた。

もう一つの目的として挙げた今後の自身の環境保全への関わり方だが、本インターンを通して、私自身が積極的に環境保全に関わっていく必要はないのではないかと感じた。なぜなら、自分自身の興味関心が必ずしも環境保全にあるわけではない、と気が付いたからである。というのも、今回環境教育のプロジェクトの一部に携わらせてもらったが、業務内容自体にあまり面白みを感じることが出来なかった。これは私が業務について深く理解するところまで到達することが出来なかったというのも大きな原因のひとつだと考えられるが、そもそも環境保全を人生の目的にするほどの情熱がもう私の中にないのではないかと感じた。このように言うと本インターンの目的に相反するようでもあるが、そうではなく、私は一消費者として日々の中で自分自身に出来るところから行動に移すことで（例えばビニール袋やペットボトルの消費を抑えるなど）、環境保全に関わっていけたらというところに落ち着いたように思う。また、私の環境保全への情熱が人生を通してやるほどのものでなかったとしても、私が自然を好きなことには変わりはない。もしまた情熱が帰ってきたら、いつでも戻ってきたいとも考えている。将来の環境リーダーに、と私をインターン生として送り出してもらったのにこのような結論に至ったことに申し訳なさを感じるが、これが今の時点での私の素直な感想である。

最後に

インターンの期間中私は Viet Nature のスタッフに助けられ、支えられ、多くの時間を共に過ごした。私がコミュニティに溶け込んだというよりは、皆が私のことを受け入れ、歓迎してくれたと強く感じる。温かい歓迎を受けたおかげで5週間のインターンの後にはベトナムで出会った人々、そしてこの土地のことが自然と大好きになっていた。自分に何が出来るだろうか、を探りに行ったインターンであったが、教えてもらい、与えてもらうことが何と多かったことだろうか。私はインターンを通して出会った人々の陽気でフレンドリーで、親切な面を愛さずにはいられない。現地スタッフの今の仕事が好きだという言葉は私にとって大いに刺激になり、感銘を受けた。今でもここでの出来事を思い出すと心が温かくなり、幸せな気持ちになる。私にこのような貴重な機会を与えて下さった SATO YAMA UMI プロジェクトの皆様、そして私を受け入れてくれた Viet Nature のスタッフの皆様から感謝いたします。



オフィスの皆で夕ご飯を食べに行ったときの一枚